

「屈原賈生列伝」と「司馬相如列伝」について
——辞賦等引用の意味

河井昭乃

はじめに

従来、史記の文学観としては、太史公自序にみえる、

夫詩書隱約者、欲遂其志之思也。昔西伯拘羑里、
演周易。孔子厄陳蔡、作春秋。屈原放逐、著離騷。
左丘失明、厥有國語。孫子贖脚、而論兵法。不韋
遷蜀、世傳呂覽。韓非囚秦、說難孤憤。詩三百篇、
大抵皆聖賢發憤之所爲作也。此人皆意有所鬱結、
不得通其道也。故述往事、思來者。

の発言に着目し、そこに書き手の体験——父の死と李
陵事件——を重ね合わせて、それが史記著述の動機に
もなつたとする、いわゆる「発憤著書」説が強調され
てきた(注1)。そしてその表出として引き合いに出さ

れるのが、屈原賈生列伝である。が、その時注目され
るのは主として屈原伝の部分で、賈誼と合伝されるこ
とについてはあまり注意が払われてこなかったように
思われる。

また文学観に関して、バートン・ワトソンは発憤著
書説だけでなく、別の見方も指摘する。それは、同じ
く太史公自序の、

余聞之先人。曰、伏羲至純厚、作易八卦。堯舜
之盛、尚書載之、禮樂作焉。湯武之隆、詩人歌之。
春秋采善貶惡、推三代之德、褒周室。非獨刺讖。

の言葉から、文学は平和な、繁栄した時代の産物であ
り、その目的はその栄光の時代を記録することにある、
との見方を示した(注2)。しかしこれに関しては史記

の書き手にとって重要ではなかったとして指摘にとどめ、やはり発憤著書説を支持する。がこの指摘はそれまでになかったものとして傾聴に値しよう。

そこで本稿では、「発憤著書」の具体化とされる屈原賈生列伝について、二人が合伝される意味を問いただし、また屈原賈生列伝と同じく辞賦の作者として伝が立てられながら(注3)、それとは違ったイメージを受ける司馬相如列伝を取りあげて、ワトソンの指摘した文学観に通ずるものではないかとの予想のもと、その伝えんとするものを考えてみたい。

一

両列伝にみられる構成上の特色として、著作を引用することによって伝を構成するという点が挙げられる。そこでまず引用について考えておく必要がある。

個人の著作について、多くの場合、

既見其書、欲觀其行事。故次其傳。至其書世多有之、是以不論。論其軼事。(管晏列伝論贊)

世既多司馬兵法、以故不論。著穰苴之列傳。

(司馬穰苴列伝論贊)

世俗所稱師旅、皆道孫子十三篇、吳起兵法、世多有。論其行事所施設者。(孫子吳起列伝論贊)

として、これらの列伝ではその著書を引用するのでなく、その人物を特徴づけるエピソードを並べることによって伝を構成し、人物を表現しようとする。

また楽書では武帝が郊祀の際に歌う楽十九章を作らせたことを述べた後に

春歌青陽、夏歌朱明、秋歌西皞、冬歌玄冥。世多有、故不論。

という。どちらの場合も、世に知れ渡つたものについてはあえて言及しないとする態度である。

ところが老子韓非列伝の韓非伝はやや事情を異にする。合伝される三人(老子、莊周、申不害)は事跡を述べて伝を構成するのに対し、韓非だけは、

然韓非知說之難、爲說難書甚具。終死於秦、不能自脫。

と前置きした上で、「說難曰……」として、その著書がかなりのスペースを割いて引用する。その後彼の書が始皇帝の目にとまり、秦に入るが、李斯・姚賈の讒言

により獄に下され、上言すること叶わず、ついには自害したことが記される。ここでは、説難、つまり説くことの難しさを熟知していたはずであろう人物が結局そこから逃れられなかったという、その人の軌跡と著作とが表裏する関係にある。韓非の死を記した後に、

申子・韓子、皆著書傳於後世。學者多有。

と管晏列伝等と同様の書きかたをしながら、

余獨悲韓子爲說難、而不能自脱。

と感慨を込めて結ぶのは、その事情の反映である。そして読む者に対し、その印象を強めるはたらきをしているのは、説くことの難しさを事細かに説いた「説難」の引用なのである。

こうしてみると、広く知られた著作は、無自覚に扱われているのではないようである。つまり、場合によっては省略されることもあり、それでも引用される場合には、そこに何らかの意味があると考えられる。そこで以下、兩列伝における引用に注意しつつ、その意味を考えてゆくことにする。

二

「屈原賈生列伝」は、戦国末期の楚人屈原と、漢の文帝期の人賈誼の二人を合伝する。まずそれぞれの部分に分けてみてゆく。

屈原、彼は楚の王族であった。その明晰なる頭脳をもつて内政、外交の両面で活躍する。懷王の信任も厚かった。しかしその裏には、それを快く思わない上官大夫らの嫉妬があった。才能を見込んでのことであろう、懷王は屈原に法令を作らせようとし、屈原はその草稿を綴っていたが、まだ完成しないうちに上官大夫はそれを奪おうとする。が屈原は渡さない。上官大夫はここぞとばかりに讒言する。それを聞いた懷王は怒り、屈原を遠ざけるようになる。そしてそのような状況に陥って屈原は「憂愁幽思」して「離騷」をつつた。本伝ではこの記述の後に離騷の評論が続く。それによれば離騷とは憂いに離う、の意味であり、己を正し忠智を尽くして君に仕えようとした屈原にとつて、讒諛の者に邪魔されたことは、これにまさる苦痛はなく、怨まずにはいられない。屈原が離騷を作ったのは、こうした窮地に陥つての怨みによるのだ、という。そ

の屈原は、斥けられた後も国を思つて二度の諫言をするのだが、聴きいれられない。その結果、楚は諸侯の連合軍に大敗し、懷王は秦で客死する運命となる。そして次に即位した頃襄王にも、子蘭の讒言により左遷される。流された屈原は長江のほとりに至り、漁父と会話を交わし（漁父）（注4）、懷沙の賦を作る（懷沙）。あらゆる価値が顛倒した世の中にあつて、己は理解されないことを繰り返し、そんな憂いを抱きつつ、そうした例は昔からあつたことだと言ひ聞かせ、死に赴こうとすることを述べる。そして文字通り沙石を懐いて自沈したことが記されて、屈原伝は結ばれる。

賈生、名は誼、若くして詩に通じ文才のあつたことで名が知られていた彼は、その才を聞いた河南守に召しだされ、ついで河南守の推薦によつて文帝に召され、博士となる。賈誼は最年少であつたが、審議の詔勅が下つた際には古參の学者達がうまく言えないこともすべて答えてみせる。文帝は彼を気に入つて、異例の昇進をさせる。そこで彼は、落ち着きをみせた世にあつて、諸々の制度改革を考える。その案は、まだ即位したばかりで余裕はないとする文帝に却下されるが、律令の改正、諸侯を任地に往かせることは、すべてかれ

の發議であつた。このように文帝に信任されたのだが、そのめざましい出世の陰には旧臣達の嫉妬があつた。彼らの讒言により、文帝は賈誼を疎外し、その建議を用いず、さらに都から遠ざけて長沙王太傅とする。長沙に向かつて賈誼は途中湘水まで来て、かつて自分と同じ境遇にあり、湘水の下流汨羅に身を沈めた屈原を思い、弔屈原賦を作る（弔屈原賦）。そのなかで、ものの価値が逆転した世の屈原の災難に同情しつつ、しかしそのようななかでもそれにふさわしい身の処し方があつたはずで、広く見渡して君とする人物を探せばよかつたのに、楚にこだわり続けた彼があのような運命をたどつたのも自業自得である、と批判の目を向ける。また長沙に在ること三年、みみずくが宿舎に飛び入つたのを見て服鳥賦を作つた（服鳥賦）。不吉をといわれるみみずくをみて心中穏やかならず、自己の運命を哀れみ、みみずくの言葉に託して、生死をも超越した無為の境地を述べたのである。一年あまりして、彼は都に呼び戻される。文帝は再び彼の才能を認め、文帝の寵子である梁懷王の太傅とした。信頼をうけた立場にあつて、諸侯の処遇をめぐつて上書諫言する。が聴きいれられなかつた。数年後、懷王が落馬して亡くなると、賈誼は責任を感じ、哭泣すること一年余り、

後を追うように死ぬ。時に年三十三であった。

この賈誼の伝は、漢書にも「賈誼伝」として立てられる。が、漢書を読んで受ける賈誼のイメージは、史記のものとは異なる。その原因は、史記と漢書の上奏の扱いの違いにある。

梁懷王太傅となった後の上奏は、史記では、

文帝復封淮南厲王子四人、皆爲列侯。賈生諫、以爲患之興自此起矣。賈生數上疏、言諸侯或連數郡、非古之制、可稍削之。文帝不聽。

と簡潔に記されるだけである。それに対し漢書では、まず「誼數上疏陳政治、多所欲匡建。其大略曰：」として、諸侯の勢力拡大、匈奴問題、人民の奢侈、礼の廢絶を危惧する上奏を引用する。そして「上深納其言、養臣下有節。」と文帝がその言葉を聴きいれたと記す。次いで梁懷王の死が記されるが、漢書の賈誼は嘆いてばかりではない。国内情勢を見渡した上で、次の梁王を立てるよう上奏し、それも「文帝於是從誼計」と受け入れられている。また史記でも触れる、淮南厲王の子を封ずるのを諫める上奏も、漢書ではその文が引用される。ただし史記の記述にみえるように、この進言だけは聴きいれられない。こうしてみると、漢書では

賈誼の上奏はその大半が受け入れられているのである。だからその論贊で

追觀孝文玄默躬行以移風俗、誼之所陳略施行矣。

といい、

誼以天年早終、雖不至公卿、未爲不遇。

不遇ではなかった、と見ることも可能なのである。しかし史記の記述からそのような評価を導くことは困難である。漢書で記されるような、賈誼が活躍した場面がすべて欠落しているために、政治的不遇のなかで一生を終えた人物のイメージが浮かびあがるのである。

さて、この列伝で屈原と賈誼を合伝することについて

屈原俱被謗、俱工辭賦、其事迹相似、故二人共傳。（考証に引く陳仁錫の説）

という指摘がある。しかしそこから

愚案、此傳以屈原爲主、故置諸魯仲連呂不韋間。（考証）

といえるのだろうか。この考証の指摘の根拠は示され

ないまま終わっている。確かに、屈原伝で「離騷」に對してみせたような熱のこもった評論は、賈誼伝にはみられない。そのことから、より屈原の方に思い入れがあったといえるかもしれない。がそれだけでこのように言ってしまうのはやや早急に思われる。そこで、両者の伝を結びつけ、しかも屈原をメインとして「屈原賈生列伝」を成り立たせている構造を考えてみたい。この両者の伝は、

屈原既死之後、楚有宋玉、唐勒、景差之徒。皆好辭而以賦見稱。然皆祖屈原之從容辭令、終莫敢直諫。其後楚日以削數十年、竟爲秦所滅。自屈原沈汨羅後百有餘年、漢有賈生、爲長沙王太傅、過湘水、投書以弔屈原。

の言葉で結ばれる。まず屈原の死後、楚にあった人々の名を挙げる。これらの人物は、いずれも文を綴ることを好み、賦によって名が知られたという。同じく楚人で、賦で有名だったという点で、屈原と共通項を持つ。しかし、これらの人物は名が記されるのみで、伝は立てられない。このようにある列伝の中で、立伝されることはないが類似の性質を持つ人物として名前のみ挙げられる例は、張丞相列伝、酷吏列伝、游侠列伝

にもみえる。張丞相列伝では

自申屠嘉死之後、景帝時、開封侯陶青、桃侯劉舍爲丞相。及今上時、柏至侯許昌、平棘侯薛澤、武彊侯趙青翟、高陵侯趙周爲丞相、皆以列侯繼嗣。妮妮廉謹、爲丞相備員而已。無所能發明、功名有著於當世者。

という。この伝では、張蒼、周昌をはじめとして漢初に御史大夫、丞相となつた人物を挙げ、その事跡を述べてゆく。が申屠嘉より後の人物については、丞相としてたいした功績も挙げられなかつたと一蹴する。とりあげて伝を記すまでもないとして、名のみを列挙して片づけているのである。酷吏列伝では「何足數哉、何足數哉。」と(注5)、游侠列伝では「曷足道哉。」と(注6)さらにはつきり言いきる。このことから考えて、同様の立場にある人物に對し評価の差があり、それに基づいて立伝されると言えそうである。

だとすれば、ここで宋玉らがとりあげられていないのは、その評価に差があるためであろう。「屈原のおだやかな文章表現を手本としたが、結局あえて直諫しようとする者はいなかつた」——屈原伝では、辭賦を作つただけでなく、国の将来を思つて諫言したこ

とが述べられていた。宋玉らは前者については屈原の後継者といえようが、後者に関しては、屈原と全く違つた態度をとつた。そのため楚は日に日に領土を削られ、秦に滅ぼされた、つまり屈原が一番憂慮していた事態に至つてしまつた。そのような事態を招いたという点で、宋玉らは評価されないのである。とすると、この伝での評価の基準は辞賦を作つただけにあるのではないことがわかる。そこで次に評価される人物として登場するのが賈誼である。

「(其)後一年、(而)有…(之事)」の形で複数の人物が合伝される形は、他に管晏列伝、孫子呉起列伝、刺客列伝、滑稽列伝に見える(注7)。それらの伝では、共通項を持つた数人の人物の伝を、それぞれ独立させながらもあるテーマのもとに——それは斉で名宰相と称えられる人物であり、同じく「孫子」と称されて兵法を伝える人物であり、匕首を片手に「己を知る者の爲めに死」——などとした人物であり、「談言微中」によつて困難を解決していく人物である——直接繋ぐはたらきをしているようである。それでは、賈誼に認められる、屈原とのつながりは何か。辞賦の作者であることはもちろんであるが、それだけでは屈原と結びつけられないことは先に見たとおりである。

だとすれば、賈誼伝で述べられるもう一つの面、その政治的態度にあるだろう。一度は才能を認められながら、讒言によつて追放される。またその後の国を憂えての諫言もききいれられない。そのような境遇となつてはじめて自己の思いを辞賦に託したのである。政治的不遇のうちにあつて自己の思いを述べる、その共通性によつて両者は合伝される。先に挙げた陳仁錫の指摘はこれで理解できる。

ところが、屈原賈生列伝では、つなぎの言葉にも一言加えられる。「長沙王太傅となつて、湘水を通りかかり、書を投げ入れて屈原を弔つた」。賈誼が屈原を弔つた賦を作っていることによつても両者は接点を持つているのである。それに関して、論贊の言葉をみてみよう。

太史公曰、余讀離騷、天問、招魂、哀郢、悲其志。適長沙、觀屈原所自沈淵、未嘗不垂涕想見其爲人。及見賈生弔之、又怪屈原以彼其材游諸侯、何國不容、而自令若是。讀服鳥賦同死生、輕去就、又爽然自失矣。

太史公曰く、余離騷、天問、招魂、哀郢を讀みては、其の志を悲しむ。長沙に適きて、屈原の自

ら沈みし所の淵を觀ては、未だ嘗て垂涕し其の人の爲りを想見せずんばならず。賈生の之を弔ふを見るに及びては、又怪しむ、屈原彼の其の材を以て諸侯に遊ぶべ、何れの國か容れられざる、而るに自らは是くの若からしむるを。服鳥賦の死生を同じくし、去就を輕んずるを讀みては、又爽然として自失す。

まず屈原の著作を読んだ感想、ゆかりの地を訪ねてその人柄を思いえがいたことを述べる。そして賈誼の著作に移るのだが、それについて何焯は、

贊、又怪屈原以彼其材云々、即賦内歴九州二句、謂賈生怪之也。爽然自失、亦謂賈生。更不下一語、含蓄無盡。(義門讀書記卷十四、史記下、前半部分は考証に引く)

として、「怪しんだ」と「茫然として自身を見失う」主体は賈誼だとする。確かに、弔屈原賦の「嗚九州而相君兮、何心懷此都」の二句で、「九州を見渡してかかるべき君に補佐役となることもできるのに、どうしてこの都だけにこだわる必要があるか」と賈誼は屈原の態度に疑問を投げかける。が、この論贊の文構造をかんがえると、前半の屈原について「余讀一、悲…。

適一、觀一、未嘗不垂涕想見…。」と屈原に関するものを見たこととその感想を挙げており、動作の主体は一貫して「余」である。とすると、賈誼について述べた部分も、同様に「及見一、又怪…。」讀一、又爽然自失矣。」と、その動作の主体を「余」で統一して読むのが自然であろう。さらに、「怪」と「自失」の上には累加の助字「又」が置かれていることから、これらの動作は、前の動作、つまり「及見」と「讀」の延長上にあるとせねばならない。「見ることとなつて」・「さらに「不思議に思う」のであり「読んで」さらに「自失する」のである。そうすれば、自ずと動作の主体は統一されよう。「賈生が彼を弔つたのを見ることとなつては、屈原はあれほどの才能をもつて諸侯をめぐれば、どの国でも受け入れられたであろうに、自らあのようにさせてしまったのを、さらに不思議に思う。服鳥賦で死と生を同じに見なし、進退を輕んじているのを読むと、さらに茫然として自身を見失う。」と読めば、賈誼の賦を読んだ感想が述べられていることになる。

そこで問題になるのが、両者のもう一つの接点である弔屈原賦の見方である。確かに、賈誼の賦を読んでいるの思いが記されている。がそれは、屈原がどうしてあ

のようになってしまったのか不思議に思う、と賈誼ではなく屈原に思いが馳せられているのである。その手がかりは、何焯も指摘した「喟九州而相君兮、何必懷此都」の言葉である。つまり、賈誼の視点を借りて屈原に疑問を投げかけているのである。ここでは賈誼の賦は屈原について考えるための手段となっており、だから賦を通じて、作者である賈誼以上にその中で描かれる屈原が思われている。興味の中心は屈原にあるのである。そのような意味で、考証の指摘は理解されよう。

以上、屈原賈生列伝について考察してみた。両者は、政治の場での不遇と、失意の中で辞賦を作ったという共通の性質により合伝される。がその中で、両者は同じレベルで扱われているのではない。賈誼の弔屈原賦が屈原を語る一手段となっており、重きは屈原にあるといえる。この列伝は単に共通の性質による合伝なるにとどまらず、弔屈原賦を媒介として両者は屈原をメインとしつつより強力に結びつけられ、「屈原賈生列伝」として成り立っているのである。

三

次に辞賦の作者としてもう一人立伝される司馬相如列伝について見ることにする。

司馬相如は蜀の成都の人である。ひととおりの学問をおえると景帝に仕え武騎常侍となるが、その好むところではなかった。この景帝は辞賦を好まなかったが、折しも来朝した梁孝王は游説の士鄒陽、枚乗、莊忌夫子らを従えていた。それを見て彼は喜び、病氣と称して辞職し、梁王のもとへ行く。そこで「子虚之賦」を作った。そのうち梁王が亡くなり、彼は蜀に戻る。そこで卓文君とのかけおち事件があつて、しばらくの後、梁孝王のもとにいたときに作った子虚賦が時の天子武帝の目にとまり称賛される。それがきっかけとなって、相如は召しだされる。「不好辭賦」の景帝とは違ふことを見てとつたのだろう、「子虚之賦」はたいしたものであるから、天子游獵賦を作り奏上することを申し出る（天子游獵賦）。その内容は、子虚が楚の雲夢での楚王の狩獵の様子を述べると、烏有先生がそれを非難し、さらに無是公が両者を非難、上林での天子の狩獵と酒宴、その後奢侈を反省することを説く、というものである。それを奏上すると天子はたいそう悦んで、郎とした。

郎となつて数年後、漢は西南にある夜郎へ通じる道を開こうと、労働力として途中の巴、蜀の人民を徴発した。その時命令に従わないものの首領を誅殺する、という事件がおこる。そこで天子は、相如に檄文を作らせ、責任者である唐蒙を譴責し、人民にそれが天子の意ではないことを知らせようとした（喻巴蜀檄）。相如はその任務を終え、戻つて報告すると、西南夷に道を開くことを建議する。天子はそれをもつともだとして、彼を使者として向かわせる。関所、道路の整備を行い、戻つて天子に報告すると、天子は非常に喜んだ。かくして相如は西南夷への道を開いたのであるが、一方でその無用さを説くものが多かった。そのことで相如も天子を諫めたく思ったが、自身が建議したことであつたために直接には諫められなかつた。そこで書を著した（難蜀父老）。この事業に反対する蜀の長老に対し、使者である自分がその考えを批判し、事業の趣旨を答えると、長老達は恥じ入つてひきさがると、という問答を綴つたもので、それによつて天子を風諷し、同時に人民に使者の趣旨と天子の意を知らせようとしたのである。

その後賄賂を受けたことが発覚して一度は免職されたが、しばらくの後再び郎となつたことなどの記述が

続き、長楊宮での狩獵に従つたことが記される。天子自ら狩獵にのり出す様子を見て、そのように危険なこととは万乗の天子のされることではありません、と上書して諫める（上疏諫獵）。それに対し、天子はもつともだとした。そして長楊宮からの帰途、宜春宮に立ち寄ると、そこで自殺した秦の二世皇帝胡亥の過失を悲しみ、賦を作つて奏上した（哀秦二世賦）。

ところで、天子は以前に子虚の賦を讀えたことがあつた。相如はさらに天子が仙術を好んでいるのを見てとつて、大人賦を奏上すると言つた。通常の仙人の伝説は帝王にふさわしい仙人の姿ではないと考え、賦を完成させたのである（大人賦）。それが奏上されると、天子は悦び、すっかりその境地に魅了された。しばらくして、相如は病気で辞職した。天子はその書が亡佚することを心配し、相如の家に使者をやつてその書を取りに行かせる。すると既に相如は亡くなつており、唯一残されていた書は、死後天子の使者に渡すようにと妻が預かつていたものだけであつた。それは封禪について書かれており、天子はそれを優れている、とした（封禪文）。そして相如の死後、実際に武帝によつて封禪の儀式が行われたのであつた。

以上、司馬相如列伝を著作活動との関わりを中心に

みた。屈原や賈誼の場合には政治的行為と著作とがはっきり分断していたのに対し、司馬相如の場合、両者の境界がはっきりしない。「其進仕宦、未嘗肯與公卿國家之事、稱病閒居、不慕官爵」と、屈原や賈誼とは違って表立って政治には関与しなかったこともあるが、その著作がすべて天子との関わりの中で位置づけられているからであろう。朝廷の一員として、使者としての役目を背負つての著作（喻巴蜀檄、難蜀父老）あるいは天子の行為を諫める文（上疏諫獵）が天子のためであるのは当然として、賦の場合も、辭賦を好み、仙術に心奪われている武帝の嗜好に応えたり（天子游獵賦、大人賦）天子につき従つた時（哀秦二世賦）のものであり、完成したものはすべて天子に奏上されている。つまり、最初から天子の目に触れることを前提として作られたものなのである。また封禪文は、漢は徳を普くゆきわたらせ瑞兆を致したのであるから封禪してしかるべき、と暗に封禪を勧めているという点で、それに値する漢の徳を顕彰するものであった。そしてそのような彼の著作に対し、「天子大説」（天子游獵賦、大人賦）「上善之」（上疏諫獵）「天子異之」（封禪文）などと天子の反応が記される。このようにして司馬相如列伝では、天子との関わりを持った著作を

引用することによって、天子のために、天子を顕彰する著作を行い、それが認められるという人物として伝えているのである。この引用の仕方について、伝の末尾では

相如他所著、若遺平陵侯書、與五公子相難草木書篇、不采。采其尤著公卿者云。

相如の他の著す所、平陵侯に遺る書、五公子に與へ草木を相ひ難ずの書が若きの篇は、采らず。

其の尤も公卿に著はるる者を采ると云ふ。（注8）

という。管晏列伝等の言及に従えば、広く知れ渡つたものについては論じなくともよいはずである。しかしここでは、司馬相如の著作に関して他の情報もあつたにかかわらず、あえて有名なものばかりを選んで引用しながら伝を構成する。こうした引用の仕方に、あるイメージを伝えようとする意図がうかがえるのである。

以上、引用されるものに注意して司馬相如列伝をみてきた。時の天子のために、その御代を顕彰する著作を行つた人物として描かれる司馬相如にとつての著作のあり方は、先に挙げた、ワトソンの指摘したもうひ

とつての文学観、つまり文学は栄光の時代に生まれ、その時代を記録することがその目的であるとの見方、に通ずるものとみることはできないだろうか。ワトソンの指摘した文学観をそのまま司馬相如の場合に置き換えてよいかどうかを考えるには、この文学観の根拠となる言葉をもう少し検討する必要がある。

この言葉は、太史公自序の、史記著述についての言及の中にみえる。孔子が乱世に合つて春秋を作つたことと比較し、上には明天子を戴き、万事平穩な御代に在つて何を論じようとするのか、との質問に答えていう。

太史公曰、唯唯、否否、不然。余聞之先人。曰、伏義至純厚、作易八卦。堯舜之盛、尚書載之、禮樂作焉。湯武之隆、詩人歌之。春秋采善貶惡、推三代之德、褒周室。非獨刺譏。漢興以來、至明天子、獲符瑞、封禪、改正朔、易服色、受命於穆清。澤流罔極、海外殊俗、重譯款塞、請來獻見者、不可勝道。臣下百官、力誦聖德、猶不能宣盡其意。且士賢能而不用、有國者之恥。主上明聖而德不布聞、有司之過也。

太史公曰く、唯唯、否否、然らず。余之を先人

に聞く。曰く、伏義至つて純厚にして、易の八卦を作る。堯舜の盛は、尚書之を載せ、禮樂ここに作る。湯武の隆は、詩人之を歌ふ。春秋善を采り惡を貶し、三代之德を推し、周室を褒む。獨り刺譏のみに非ず、と。漢興りて以來、明天子に至り、符瑞を獲、封禪し、正朔を改め、服色を易へ、命を穆清に受く。澤流極まること罔く、海外の殊俗、譯を重ね塞を款き、來りて獻見を請ふ者、勝げて道ふべからず。臣下百官、聖德を力誦するも、猶ほ其の意を宣べ盡くすこと能はざるがごとし。且つ士の賢能にして用ひられざるは、國を有つ者の恥なり。主上明聖にして徳布聞せざるは、有司の過ちなり。

としてまず六経が平穩な、輝かしい時代を記録したものであることをいう。そして現在には明天子の聖徳あふれる時代だとして、その聖徳を明らかにして賢能の人物を伝えること、それが先代から受け継いだ著述の目的であると述べる。真意であるかはさておき、ここでは同時代の立場から、現在の、武帝の時代を「明天子」の御代と認め、それを伝えるための著作としているのである。

この状況は、そのまま司馬相如の立場である。著作によつて見いだされ、天子の側近くにあつて、また朝廷の使者として異国に赴いて、天子をたたえる著作を行ったというのは当然といえよう。後に詳しく述べるが、この言葉に含まれる、聖徳あふれる時代だとする根拠、そのいくつかは、実際に司馬相如によつて称賛されているのである。重要なのは、その伝の中で、一貫して天子のために、その時代を顕彰する著作を行ったことばかりが意図的に描かれていることである。つまり、そのような著作者の姿勢もあり得ることが認められているのである。だとすれば、司馬相如列伝は、輝かしい時代にあつてそれを顕彰するという、発憤著書と正反対の文学観を反映するものとみなすことができるであらう。ワトソンの指摘したもう一つの文学観、それは司馬相如列伝において具体化されているのである。

四

以上、司馬相如列伝が、栄光の時代に文学は生まれるとの文学観の具体化であることを見てきた。とする

と、太史公自序にみえる二つの文学観は、ともに辞賦の作者として立伝される屈原賈生列伝と司馬相如列伝に反映されているのである。しかし、だからといって両者を同じ比重でみることに問題があらう。今まで議論のなされてきた発憤著書説はよいとしても、もう一方の見方は、検討が必要である。ワトソンはそれが一度しか述べられていないこと、父の言葉として伝えることの二点からほとんど無視されたとするが、栄光の時代の文学との見方がどれほどのものであるかをまずそれが表れる言葉の発せられた場面に即して考えねばならない。

ここで注意せねばならないのは、武帝の時代を聖徳のあふれる時代だとする根拠である。瑞兆の現れ、封禅、諸制度の変更、また諸外国の来朝をあげている。確かにそのいくつかは、司馬相如列伝に引用されるもののなかでも天子の徳をたたえるものとして賛辞が連ねられるのだが、それがそのまま史記の見方といえるかどうかを考える必要がある。

まず封禅に関して、司馬相如列伝では武帝が仙術を好むのを見て帝王にふさわしい仙人の姿を述べた大人賦を、また武帝に封禅すべきことを暗に勧めた封禅文

を作ったことが述べられていた。その封禪と仙術について、封禪書に記述がある。

封禪書は、舜から武帝までの封禪及び様々な祭祀の記録である。そもそも封禪とは、天命を受け、天子の徳が普くゆきわたり天下太平となつてはじめて行うことのできる、国の安泰を天地に告げる儀式である。だからこゝ舜や周の成王は行うことができたのであるし、斉の桓公は管仲に制止されたのである。そのようなものであるはずなのに、武帝の封禪の様子は、方士の公孫卿、丁公の「封禪すれば不死登仙がかなえられる」との言葉に惑わされ、儒者のいうことをことごとく斥け、武帝の個人的な欲望をかなえる手段として実施された、と記される。それに関連して、封禪書の武帝期の記述にはいかがわしい方士たちが次々と登場する。李少君、安期生、少翁など、武帝は彼らに何度も騙されながらそれでも不老不死を求め続ける。その記述は

今天子初即位、尤敬鬼神之祀。

の言葉にはじまり、

天子益怠厭方士言怪迂語矣。然羈縻不絶、冀遭其眞。自此之後、方士言神祠者彌衆。然其効可睹。

と結ばれる。その枠組みの中で、封禪の意味を取り違え、ひたすら不死登仙を求めてやまない武帝の姿を、皮肉を込めて描いているのである。

また諸外国の来朝については、司馬相如が西南夷に通ずる道を開こうとしたことが関係しよう。喻巴蜀檄では、匈奴や西域の国などが身を正義に寄せ、漢に朝貢、臣事しようとする」と述べている。これらに関する記述が平準書にみえる。

平準書ではまず、漢の創業以来武帝即位までの約七十年間、平穩無事に過ぎ、食糧、貨幣ともに不足することなく、人民は生活に困ることなく、我が身を大切にし法を犯すことを憚った状況を述べる。その後

物盛而衰、固其變也。

といつて武帝期の記述を開始する。そこではまず、ありあまる経済力をたよりに東西南北の周辺地域に勢力を拡大しようとして人民を経済的、体力的に疲弊させたことをいう。西南夷も例外ではなく、

唐蒙、司馬相如、開路西南夷、鑿山通道千餘里、

以廣巴蜀。巴蜀之民罷焉。

と述べられる。それら事業の結果、人民は疲弊し法逃

れするようになり、財政は困窮して売官、贖罪が行われるようになったという。そして財政再建のための貨幣改革も人民の盜鑄をエスカレートさせるという悪循環に陥り、それをとりおさえるための法令の嚴峻化が必然的におこった。このような武帝期の社会混乱は、武帝以前のことを述べた部分に

故人人自愛而重犯法、先行義而後細恥辱焉。當此之時、網疏而民富、役財驕溢。

故に人人自ら愛して法を犯すを重かり、行義を先にし而る後に恥辱を細く。此の時に當り、網疏にして民富み、役財驕溢たり。

とあるのと対比すると、批判的にみなされていることがわかるのである。するとこの混乱状況を招いた原因つまり武帝期の記述の冒頭で述べられる対外政策、それを称賛の対象をしてはいないのである。

以上、封禅書と平準書の記述をもとに、美名に裏打ちされた武帝の事業が実は批判的にみなされていることを確認した。史記の立場からすれば、司馬相如が贊辭を連ねた事業、顕彰した時代が、本当にそれにふさわしいものであったと見ることはできないのである。とするとそれを立脚点として発せられた太史公自序の

言葉がどれほど真実であったか、問題視されよう。となれば、その状況をそのまま反映する、何の疑いもなく武帝の御代をたたえる司馬相如の姿勢をどれほどのものと思っていたか、少なくとも手放しで同調できるものではなかったであろう。そういった意味で、このような著作態度が重視されていたとはいえないのである。史記著述の動機となったともいわれるほどに、發憤著書のあり方が史記の中で消化されているのと比較するとき、両者の差は歴然とするのである。

おわりに

以上、屈原賈生列伝と司馬相如列伝を引用されるものから考察してきた。その引用は、対照的な著作者の姿を伝えるものであり、それはちょうど、太史公自序にみえる二つの文学観を反映するものである。さらに賈誼の弔屈原賦の引用は、合伝という列伝構造を成立させるという役割も果たしていることを確認した。これらの伝でも、韓非伝の場合と同様、引用が無自覚になされている訳ではない。また兩列伝の反映する文学観、それは全く対等なのではなく、「榮光の時代の文

学」との見方はそれがどれほどの重みを持つか、疑問が残る。がしかし、そのようなあり方も、司馬相如列伝では認められているのである。

最後に指摘した、二つの文学観の比重について、今まで史記の中で武帝の時代がどう扱われているかとの視点から考えてきたのだが、実は司馬相如列伝論贊にも表れているのである。最後にそのことを確認しておこう。

太史公曰、春秋、推見至隱、易、本隱之顯(注9)。
大雅、言王公大人、而德逮黎庶、小雅、譏小己之得失、其流及上。所以言雖外殊、其合德一也。相如雖多虛辭濫說、然其要歸引之節儉。此與詩之風諫何異。(注10)余采其語可論者著于篇。

太史公曰く、春秋は見を推して隱に至り、易は隱に本づき顯に之く。大雅は王公大人を言ひて、而して徳黎庶に逮び、小雅は小己の得失を譏り、其の流上に及ぶ。以て言ふ所外殊すると雖も、其の徳に合ふは一なり。相如虚辭濫說多しと雖も、然れども其の要は之を節儉に歸引す。此れ詩の風諫と何ぞ異ならん。余其の語の論ずべき者を采りて篇に著す。

春秋、易、大雅、小雅は、言うことは違ふとはいへ、徳に合致する点ではおなじであり、それと同じように相如の言葉は虚語、誇大表現が多いとはいへ、詩の風諫と変わりはない、という。「虚辭濫說」とは、天子游獵賦や哀秦二世賦にみられるような、極端なまでに風物を並べたり、過度の修辭を加えることを指すのであろう。相如の著作を「虚辭濫說」と認めながら、しかしそれでも風諫の概念をもちだして、詩と同じレベルにまで上げて評価しようとしているようにもみえる。がしかし、結局は詩の評価を借りたものでしかなく、風諫についても天子游獵賦、難蜀父老以外では明らかにされていないのを見ると(注11)、実際に作品の中でその作用がどれほど認められていたのかは疑問が残る。そして、先に挙げた屈原賈生列伝の論贊では、その人物や著作に対する感慨が一つ一つ述べられていた。それと比較してみると、ここには個々の作品に対する理解や思いもみえず、絡げて評価として「詩の風諫」の一言で片付けているのは、非常に冷淡なものと目に映るのである。この点にも両列伝、そして二つの文学観の重みの違いをみることができるであろう。

(注)

- 1 たとえば李長之『司馬遷之人格與風格』第九章三節「司馬遷之文學批評」(上海開明書局一九四八)、青木五郎「司馬遷の發憤著書說—不遇と文學」(『中国の文學論』所収、汲古書院一九八七)
- 2 バートン・ワトソン『司馬遷』第五章「司馬遷の思想」(今鷹眞訳、筑摩書房一九六五)
- 3 文學様式としての賦の研究の立場からは、屈原、賈誼、司馬相如の作品は区別される(鈴木虎雄『賦史大要』富山房一九三六、中島千秋『賦の成立と展開』関洋紙店印刷所一九六三)。がここでは、乃作懷沙之賦。其辭曰：(屈原伝)及渡湘水、爲賦以弔屈原。其辭曰：(賈生伝)會景帝不好辭賦。(司馬相如伝)請爲天子游獵賦。其辭曰：(司馬相如伝)と同様に扱われていることから、三者の作品を「辭賦」として一緒にとりあげる。
- 4 以下、引用される場合には、括弧内に作品名を記す。なお、この漁父だけは他の引用と少し異なる。漁父に答える彼の言葉が、その生き方を象徴するために引用されたのであるが、これだけは彼の軌跡—追放され、長江のほとりをさまよい歩き、他者と言葉を交わす—として行事に組み込まれているという点で、他と区別される。本稿では行事を述べるだけなのであれば不要と思われる引用について考察することが目的なので、考察の対象からはずすことにする。
- 5 至若蜀守馮當暴挫、廣漢李貞擅殺、東郡彌僕鋸項、天水駱璧推成、河東褚廣妄殺、京兆無忌、馮翊殷周蝮鷲、水衡閻奉朴擊賣請、何足數哉、何足數哉。(酷吏列伝論贊)
- 6 至若北道姚氏、西道諸杜、南道仇景、東道趙他羽公子、南陽趙調之徒、此盜跖居民間者耳。曷足道哉。此乃鄉朱家之羞也。(游侠列伝)
- 7 この形式については杉山寛行「刺客列傳を讀む—主題と變奏」(『山下龍二教授退官記念論集』所収、研文社一九九〇)に考察がある。
- 8 すでに佚書である以上、その内容はわからないので、考証に「遺平陵侯、與五公子二書、佚」とあるのに従ってよむ。なお中華書局標点本は、遺平陵侯書、與五公子相難、草木書の三作品とする。
- 9 原文「易、本隱之以顯」。考証の説により、漢書の読みに従って「以」を衍字とする。

10 この後、「揚雄以爲：不已虧乎」の二十八字が入るが、竄入とみなし扱わない。

11 其卒章歸之於節儉、因以風諫、奏之天子。（天子游獵賦）相如欲諫、業已建之、不敢。乃著書、籍以蜀父老爲辭、而已詰難之、以風天子。（難蜀父老）